

原著

障害をもつ高齢者が 高齢者放送大学で学習することの意味

藤原 瑞穂¹ 堀 薫 夫²

1 神戸学院大学総合リハビリテーション学部

2 大阪教育大学生涯教育計画論研究室

【要約】兵庫県いなみ野学園が開講する高齢者放送大学（ラジオ講座）を事例として、そこでの学習支援体制とそこで学ぶ障害をもつ高齢者の学習の意義を、高齢者放送大学担当者へのインタビューと4名の（身体的）障害をもつ高齢者の事例をもとに考察した。この高齢者放送大学では、受講する高齢者がラジオ講座を聴くだけでなく、感想文提出などをおして、交流の機会が提供されているという特徴をもつ。高齢者放送大学担当者への調査からは、高齢者放送大学が学習機会面で不利な状況にある高齢者への「届ける学習」となっていることが示された。障害をもつ高齢者への事例調査からは、学習を通じて個人の精神的世界の充実化を図る、過去の感覚の蘇りというパーソナルな学習の側面と、感想文がテキストに掲載され、大学と質疑を交わしたり他の受講生からの手紙を受け取ったりするなどの、社会的な交流の側面が示された。前者は生活に対する前向きの姿勢や適度な挑戦感の涵養を示唆し、後者は対話性や反響性のある交流の場の形成を示唆していた。調査参加者はすべて後期高齢期にあり、自身の障害や老いと死を身近に感じながらも、学習を通じての精神世界の充実化により、人生に対する前向きの姿勢を創出していたといえる。

キーワード：高齢者、障害、学習、高齢者放送大学

I. 研究の背景と目的

われわれが人生の完成期である高齢期に何らかの（身体的）障害をもったとき、その生活を再建していくことは、当事者にとってもまたその人を取り巻く他者や社会にとっても深刻な課題となる。こうした障害をもつ高齢者への支援に関しては、医療や保健、福祉領域からの実践や研究が積極的に取り組まれている。しかし、この生活再建のプロセスに高齢者の「学習（learning）」活動がいかに寄与しているのかに関する研究はほとんどうかがわれない。ここでいう「学習」とは、生活者としての回復を図り、個々のQOLの向上をめ

ざす「リハビリテーション」の段階をこえ、経験による行動の変容を通じて、さらなる成長や発達（development）の段階をも指向する活動をさす[1]。障害をもつ高齢者にとって「リハビリテーション」が生活再建とQOLの向上に軸足を置くとするならば、「学習」は自己実現と生涯発達に軸足を置くものであり、そのめざす方向という点では、双方は同様であるということもできよう。そこで本稿では、こうした状況をふまえたうえで、障害をもつ高齢者の生活再建において、「学習」がいかなる役割を担っているのかに注目する。

教育老年学の領域では、高齢者の学習活動への参加の問題はこれまで、多くの場合、エルダーホ

ステルや第三期の大学、高齢者大学などを事例として、主に60代から70代前半の（いわゆる前期高齢期の）比較的活動的な人たちの分析をもとに描かれてきた〔2〕。またこうした場に参加する高齢者像をもとに、エイジレス・セルフ（シャロン・カウフマン）〔3〕や老いの泉（ベティ・フリーダン）〔4〕、エイジ・ウェーブ（ケン・ディヒトバルト）〔5〕といった、高齢期の学習や社会参加活動をささえる理論的根拠が構築されてきた。しかし一方で、例えば75歳以上の後期高齢者や障害をもつ高齢者への学習支援のあり方は、これまでほとんど不問に付されてきたともいえる。したがって高齢者への学習支援のあり方をより深化させていくためには、こうした層の高齢者への学習支援およびその層に特有の学習のあり方を明らかにする研究が不可欠だといえる。

ところで後期高齢期の者の発達や学習のあり方については、近年スウェーデンのラース・トーンスタム（Tornstam, L.）の老年期超越の議論〔6〕あるいは権藤恭之〔7〕らの百寿者の生活意識研究など、一定の知見が蓄積されてきているが、障害をもつ高齢者の学習実態の研究はほとんどない。また後期高齢期および障害をもつ高齢者に対しては、外向的、活動的な社会参加型の学習活動とはあまり親和的でなく、内的世界を充実させることや室内的余暇や楽しみ、また身体的運動負荷をとまなわない学習活動と親和的で、かつこうした側面を強調した学習が重視されるという指摘がある〔6、8〕。こうした点を考慮するならば、高齢者向け放送大学のラジオ番組を聴くことによって展開される学習は、これらの人びとにとって受容されやすいものではないかと考えられる。

本稿ではこうした理解のもとに障害をもつ高齢者を位置づけたうえで、兵庫県いなみ野学園が開講する高齢者放送大学（以下放送大学と略す）で学ぶ、障害をもつ高齢者の事例を取り上げ、そこでの学習支援体制のシステムと障害高齢者の学習

の意義を描写していく。こうした作業を通じて、高齢者の生活のなかでの学習の意味づけを明らかにすることを本稿のねらいとする。

Ⅱ. 方法

A. 研究協力者

本研究の研究協力者は、放送大学の担当者ならびに何らかの（身体的）障害をもちながら放送大学を継続している60歳以上の者である。障害をもつ高齢者の選定にあたっては、放送大学事務局に上記の条件に当てはまる方の紹介を依頼した。事前に放送大学より本人に協力依頼が行われ、承諾の得られたのちに、あらためて研究者より調査への協力を依頼し、同意の得られた者を調査対象とした。研究協力者の概要を表1に示す。

B. 調査方法

研究疑問は「障害をもつ高齢者にとって放送大学にはどのような意味と役割があるのか」である。まず、放送大学での支援体制を明らかにするために、担当者にその概要をインタビューした。次に、研究協力の得られた高齢者に対し、作業歴、発症・受症時の状況と現在までの生活歴、放送大学や自宅等での学習状況とその意味についてインタビューを行った。インタビューは本人の指定する時間と場所で行った。具体的には本人の自宅や喫茶店、活動場所である体育館などであった。その際、希望に応じて家族が同席した。インタビューの内容は本人の許可を得てICレコーダーに録音した。承諾が得られない場合はメモをとり、インタビュー終了後直ちに逐語録にした（1名）。

調査期間は2008年3月から12月であった。

C. 分析手順

本研究は、放送大学を受講する障害をもつ高齢者の体験に近づくために、質的記述的に分析した。

表1 研究協力者の概要

研究協力者	A	B	C	D
年 齢	80 代後半	80 代前半	70 代後半	80 代前半
性 別	女 性	女 性	女 性	男 性
住居形態	独 居	息子夫婦と同居	独 居	妻と同居
放送大学在籍年	20 年以上	20 年以上	7 年	20 年以上
疾患名/障害	スモン病	骨盤骨折	脳血管障害	脳血管障害
	歩行障害	歩行障害	右片麻痺	右片麻痺
	伝え歩き可	屋外杖歩行可	屋内杖歩行可	屋内杖歩行可
	車椅子使用	自動車運転可		デイケア利用
発症/受傷後経過年	20 年以上	7 年	1 年	5 年

分析は、ジオルジ [9] の分析手順を参考にしながら、以下の過程をたどった。①インタビュー内容を逐語録に起こし、そこにインタビューの際に観察したデータならびにその後に受け取った手紙の内容を加えて読み込み、語りの記述全体を把握する。②逐語録を読みながら、研究協力者の体験を、放送大学を始めた時期、受講中から現在に至るまでの時期に分ける。③逐語録の中で、同じ状況について語られている部分とそれに付随する感情の表現を一つの構成要素として、その状況を研究協力者がどのように意味づけているか把握する。④各構成要素を、それを特徴づけている研究協力者が実際に語った言葉で表す。⑤研究協力者の実際の言葉を、研究者の言葉に置き換えながら構成要素ごとに記述する。⑥各構成要素を経時的に並べ、高齢者の体験した世界を一つのストーリーにまとめ、研究者が解釈し、体験の中心的な意味を見いだす。⑦最後に、高齢者が放送大学を受講する意味の特徴や類型化を試みる。

D. 倫理的配慮

本研究は、神戸学院大学ヒトを対象とする研究・教育上の調査・実験審査において承認を得たのちに実施した。倫理的配慮として、インタビュー実施の際に、研究協力者に対して、研究の目的と方法ならびに個人情報保護等について文書と口頭で説明し、その後、調査参加への同意を得て実施

した。また、インタビュー中は研究協力者の体調に十分配慮した。

Ⅲ. 結果

A. 高齢者放送大学の概要

放送大学は、公益財団法人兵庫県生きがい創造協会が運営主体となり、いなみ野学園に1977年4月に設置された[10]。入学資格と定員を表2に、講座内容について表3に示す。受講者は、毎週土曜日午前6時30分から30分間のラジオ講座を聴講して課題（感想文）を提出する。年50回程度の講座のうち提出課題があるのが18回で、そのうち10回提出すると修了証書が授与される。月1回郵送されてくるテキストには、毎週の放送内容と担当する講師の紹介が掲載され、事前に予習することができる。受講生から送られてくる感想文は生涯聴講生を含めて1,700通におよぶこともあり、そのなかから偏りのないよう20名前後の感想文が選ばれ、テキストの「心のこだま」のコーナーで紹介される。その冒頭には「この感想文を読んでさらに感じるものがあったら、その方に便りをしましょう。二度とない人生の中の心のふれあいとして、心のこだまとして…」といった記載がある。放送大学では学生名簿が作成され、全員に配布されているため、この学生名簿をもとに感想文を書いた人に手紙を出したり電話をかけたりする

表2 高齢者放送大学の入学資格・定員等

入学資格	本科生：兵庫県内に在住する満60歳以上の者 聴講生：居住地，年齢等不問 生涯聴講生：原則として本科を修了した者
学習年限	本科生：1年 聴講生，生涯聴講生は1年ごとに更新
定員	本科生：500名 聴講生，生涯聴講生は定員を設けない
経費	本科生：6,000円 聴講生・生涯聴講生：5,000円
自主活動	県内各地に30の放送大学友の会が自主的に結成され，各友の会はお互いに交流を図りながら学習会の開催やボランティア活動などを自主的に行っている

兵庫県生きがい創造協会編『平成24年度事業概要』私家版，2012．より引用

表3 高齢者放送大学の講座内容

講座等	運営方針	学習方法
ラジオ講座	毎週土曜日午前6時30分から30分間のラジオ講座を放送 番組編成の4つの主題 ① 心豊かな高齢期の実現 ② 心かよいあう長寿社会の実現 ③ 視野を広げる一般教養 ④ 健康と長寿の探求	・ 聴講後，はがき1枚で感想文（レポート）提出 ・ 本科生に対しては月1回往復はがきで提出された感想文について返信用はがきを用いて個々に助言 ・ 講義の概要や学生の感想文などを掲載したテキストを毎月1回発行 ・ これらテキストをもとに講座の予習や学生の深化など，主体的に学習
スクーリングおよび研修	学生相互あるいは学生と講師・職員の交流を深めるため，スクーリングや宿泊研修を行うほか文芸祭を開催	・ 中央スクーリング いなみ野学園（年2回） ・ 地方スクーリング 阪神，丹波，但馬，西播磨，淡路（年1回）

兵庫県生きがい創造協会編『平成24年度事業概要』私家版，2012．より引用

ことができる仕組みになっている。

2012年5月1日現在、放送大学には本科生228名、聴講生53名、生涯聴講生2,302名の計2,583名が在籍している。内訳は、男性39.9%、女性60.1%で女性のほうが多く、年齢別では、60代前半4.2%、60代後半11.9%、70代前半22.8%、70代後半24.8%、80代前半20.5%、85歳以上15.5%で、平均年齢は76.5歳であった。また地域別にみると、通学の交通手段が不便な山間部（丹波・但馬）で

は、いなみ野学園の高齢者大学講座受講者（通学型の高齢者大学）の比率はほぼ0%であるのに対し、放送大学受講者は丹波11.1%、但馬6.4%であった。つまり放送大学は、通学が困難な層への学習機会を届けているアウトリーチ活動だともいえる。番組のプログラムはインターネットでも配信されている。

B. 障害をもつ高齢者にとっての放送大学の意味

以下、障害をもつ高齢者4名への放送大学での体験の中心的な意味を示してから、時系列でその意味づけとなった体験を構成要素ごとに記述する。なお、研究協力者自身の言葉は「 」、その他の者が語った言葉と自身の発言を回想した部分は『 』、固有名詞は〇〇、省略した箇所は … で示した。また、わかりにくい文脈には（ ）内に補足し提示した。

1. Aさん（80代後半、女性、スモン病）の場合

Aさんにとって放送大学は、いつでも疑問に答えてくれ、議論できる「知恵袋のようなもの」という意味があり、それは、以下の体験から形成されていた。

スモン病を発症してケアハウスで一人暮らしを営むAさんは歩行が困難であり、そのために日常生活に介助が必要であった。発症前に、認知症の夫を自宅で介護した経験がある。若い頃より電話や手紙を通じて人とのつながりを大切にしていた。Aさんは友の会の設立に関わっている。

a. 障害のある自分を受け入れてくれる

Aさんははじめ、障害のために他人に迷惑がかかることを危惧し、放送大学に入学することを躊躇していた。しかし、信頼を寄せる人からの薦めがきっかけとなり、入学を決める。

「はじめいろいろな人に誘われたけれど車椅子だったので入らなかったんよ。自分の身体の不自由さを知っているから … でも学長さんから『Aさん、なんで入らないの?』と言われ、学生さんは何千人といるのになんで私の名前を知っているのか不思議だね。『何を遠慮しているのか。私が入れと言っているのに!』と言われたので入ったんです。『みんなで見学に行く時にバスで行ったんです。そのときにも『わしが押してあげる』と

先生に車いすを押してもらった。どきどきしながらトイレにいったね … 』」。

b. 「先生」との関係の構築。何でも聞いて話せる関係、そして頼りにされる存在

Aさんは、友の会の設立に関わっている関係で知り合いの「先生」が多い。Aさんにとって「先生」は身近な「知恵袋」であり、逆にAさん自身も「先生」にもアドバイスできる存在であると感じている。

「先生方の専門を知っているんです。質問があればその先生に電話をかけるんです。たいていいらっしゃいます。親切に丁寧に教えてくださいますし資料も送ってくださいます。『あんたは何年経っても先生、先生と言ってくれる』と言われ、私も喜ぶし先生も喜ぶ … 離れてしまったら尋ねられないでしょ。それでいつまでもおらしてもらうんです。おじゃまだと言われたらやめますけれどね」。

「… スクーリングで、『先生、今日の話はとてもよかったです。でも特急でした。話が速いので今度はゆっくりとお願いします』と言ったんです。次にその先生のお話を聞いたときはゆっくり話されたんですね。そしたら先生の方から『Aさん、今度はどうやった?』と尋ねられて、『今度は良かったですよ』と言ったら嬉しそうにされました」。

「あの先生がここに来られるんです。『僕が書いた（認知症に関する）論文を直してくれ』と。『私にはそんなたいそうなことはできませんが（認知症の夫の介護について）体験談を話しますのでいいところをとってください』と言って話をしました」。

c. 老いと死が身近なものとなるなかで、自分にできることをやる

「女学校197名卒業して生きているのは20名足

らず。必ず誕生日にみんなに電話してあげるんです。元気だったらそれでいいんです。…知っている先生方も辞めて行かれる。97歳の先生も病院に入院されて…だんだん知っている先生が少なくなっていくます」。

「80、90歳の方が『話をきいて』とここにやってくる。みんな愚痴だけれどその聞き役をやっているんですよ。短い人は1時間、長い人は2時間。大変ね～と聞いてあるだけ」。

「郷土史に関心があって地域文化の語り部をしているんですよ」。

2. Bさんの場合（80代前半、女性、交通事故による骨盤骨折）

Bさんにとって放送大学は、心に響く話に自分の心の動きを重ね合わせ、自分自身を前向きにできるという意味があり、それは、以下の体験から形成されていた。

Bさんは、いなみ野学園で放送大学を知り、修了後に受講を始める。7年前に交通事故にあい、2ヶ月あまりの入院と1年間の外来でのリハビリテーションを受け、歩行の困難さと持続的な痛みを抱えて生活していた。杖歩行と自動車の運転が可能となってからは、以前から行っていた放送大学や小学校の読み聞かせボランティア（郷土の民話）、18年続いている地域のサークル活動などで再び多くの人々とつながっていった。「地域の人びとの支えがあったからこそここまでこれた」と語っている。「…教室に入りやすい一番近い所に駐車場がほしいので身体障害者手帳の申請をしました。そんなものいらないと思っていたけれど、駐車場をもらうために手帳をもらいました。…（痛みやつらさは）一般の人には理解できない。でもそれに甘えたらいけないと思っていたけれどね」。

a. 心に響く音、お話のリズムに自分の心の動きを重ねて受け止めていく

自宅のラジオから流れてくる番組を聞くという作業。ラジオというメディアから流れてくることばをBさんは次のように表現している。

「響くもの、心に伝わってくるものがあるんです。先生方のリズムあることばのお話。それによって気持ちが前向きになります。どういったいいのか、それくらい人間の体には響きが素直に届く。響きという字は、ふるさとを音が支えているんですね。それに気付いたときに日本語はすごいと思いました。そのものを持っているのが放送大学なんです。…それにプラスして自分たちの心の動きを重ねて受け止めていくことができ、お話によって色んなことを思い出せる。先生のお話をレポートに書いていくのではなくて、いろいろな思いが出てきてそれを書くんです。自分自身を前向きにできるんです。心のなかに頭のなかに誕生してくる…」。

b. 地域を創るために、後世に残すために活動する

放送大学に所属しながら、Bさんは同じ財団が運営するひょうごふるさと創成塾を受講した。ここでは、地域の課題を解決するための「ふるさとづくりのリーダー」を養成している。修了後、Bさんは動き出す。

「〇〇で市民参加型の情報誌を作っているんですよ。私は編集部員になっている」。

「どういうふうな状況の人であっても、体の状況よ。身体に問題があって誕生してきている人もいる。この人達だからこそ世の中に役立つものを持って誕生している。人間だけではなくて草もダメな草だと思わないで、草はちょっと早い目にひいてあげると堆肥になってくれる。土のための役割になる。どんな生き物でもその人にしかできないことがある。命は尊いんだということを、今日小学校2年生に読み聞かせをしてきたんです」。

c. 自然のなかで身体の奥深くにしみこんでいる 動きのパターンが蘇る体験

障害によって動きづらさが生じている身体。しかしBさんは、昔なじみのある作業や習慣化された身体の奥深くにしみこんでいた動きのパターンが、その当時の記憶とともに蘇ってくる経験をしている。

「ひょうごふるさと創成塾で淡路島に行ったとき、竹でやぐらを作っているところがあってね。竹を踏んでいる間にそれが懐かしくなって … 自分の体にふわ～と感じるようなことがあったんです。しまいには杖を途中においててっぺんまで行ってしまった。降りるときにどういうふうに降りようかと思っていたけれど、自然に体が動いてびょんと飛ぶことができたんよ。嬉しかったわ。昔なじみのある手触りで自然と体と心が動いていたんです。自然や昔馴染んだことには可能性が秘められているんじゃないかと思う。土は違う、大地は違う。新たな体の動きができるんです」。

3. Cさんの場合（70代後半、女性、脳血管障害 による右片麻痺）

Cさんにとって放送大学は、人とつながり、支え合い、励まし合うという意味があり、それは、以下の体験から形成されていた。

Cさんは活動的な人だった。「老人会の役がまわってきて、しぶしぶ老人会に入ったんです。でもそのクラブで染め物や絵を描いたり書道を習ってね。自営業だったから、若い頃はできなかった。おじいさんが死んで、自分の時間ができて色々な事をやりました。ピアノが弾けないだけ。音符が読めません。戦争の真っ最中、ドレミファはなかった。はにほへといろはと習ったんよ。終戦後にドレミファになったときに呼び名をよう変えなかった。それで五線譜が読めなかった」。

一人暮らしとなったCさんは、夫の三回忌を終

えた頃、隣に住む友達から放送大学を勧められる。その友達は、放送大学ラジオ講座のお話は娘を亡くした悲しみから立ち直るきっかけを与えてくれたと語っている。

Cさんは、1年前に脳血管障害を発症し、4週間入院した。その後自宅に帰り、一人暮らしを再開する。子どもたちが頻りに様子を見に来てくれるとはいえ、日々の暮らしは不安でたまらなかった。「… 家に帰ってから不自由を感じることでなければね。とことん不自由。一人暮らしで何もかも自分でしなければならないしね。近所の人にあまえて近所の友達に来てもらったり子どもたちが来てくれる。でも雪が降ったら来てくれない。一人で寒いし寂しいし不安で。悔しくて、悔しくて。便所に『いかにによらず努力しろ』と書いて貼っています」。Cさんは、家の周りを杖を使って歩けるまでになった。

a. 放送大学という作業

Cさんは、放送大学を隣の友達と一緒に楽しみに受講している。「テキストが送られてくると隣に行って『来たな～』と二人で顔を見合わせるんです。テキストを読んで大事なところに線を引いて、そして書き込みをしながら聞いてね … 放送は録音して後で聞き返せるようにしてね。それでテープの貸し借りをするんです。… 感想文をはがき一枚に短くまとめるのが難しくてね。… 読み返したら自分で書いた字が読めない。書くのに一週間はかかるのよ。… そうして卒業させてもらって免状をもらいました」。

また、放送大学の良さを次のように語っている。「町の〇〇老人大学は聞きっぱなし。何も課題がないし刺激がない。コースの先生は『笑ってください』と言うだけでね。帰ってから感想文を書こうということまでいかない。やっぱり放送大学は感想文を書いてやりとりがあるのがいい」。

地方スクーリングでは、先生－生徒の関係を超

えた人間のつながりがある。「スクーリングで一緒の席で先生と食事をとっている時、携帯電話で『家に〇〇時に帰るよ』と電話をしている姿は本当に家のよいお父さんになっていたんよ。その姿は人間そのものだったわ。難しい話をしているけれど、ああ、この人なら大丈夫と思ったよ」。

b. テキスト、はがき、電話、スクーリングでまだ見ぬ友と交流する

「医師にもわかってもらえない」自身の動きづらさと痛み、そして一人暮らしの心細さを放送大学のテキストに投稿したところ、直ちに「見ず知らずの友達」から多くの励ましの手紙を受け取る。Cさんは「一人ではない」ことを実感し、手紙を交換している未だ見ぬ友達と地方スクーリングで出会えるのを楽しみにしている。

「テキストが配達されるのを心待ちにしてね。“心のこだま”で大勢の気持ちがわかるのよね。…自分の感想文がテキストに載ったら即手紙が来る。…私が病気したと書くと、全然知らない方から手紙が来る。はじめてなので病気の心得を知らないでしょう。そういう人に教えてもらうのです … こういう人は実行が早い。即実行。すぐに手紙がくる …」。

「… そして俳句を大阪の大会に出すときに書にしてもらった〇〇さんから『休んでいるのではないか?』と案じる手紙も来るので一生懸命にやる。ふるいもってね」。

「同じ人が毎月載ったら自然に名前を覚えるんでね。そしてその人に会いたいな～と思う。スクーリングで絶対に会いたいと思ってね。… 車で送ってもらってわくわくしながら行くんです。そしてその人をみつけて接近するんです。名札を胸につけているのでわかるんよ … 出会って話していると誰でも何らかの傷を負っていることがわかる。それを慰め合ってね … 自分がこのようになったら人の気持ちもわかるようになるんですね

… だれも人間苦しんだと思って。… 誰とでも友達になれるのは幸せ。知らない人も友達になる。出会ってよかったな～とスクーリングに行ってしまう」。

c. 老いと死が身近なものになる。みんな死んでいくのだけれど今を生きる

「… 訃報もよく聞く。あんたにだけは言うとかないけん」と電話がかかってきたんです。〇〇さんが亡くなったと。悲しくて、悲しくて。… 一期一会だね。… みんな生まれたままでは死なない。自分がこうなって。晩にどうなるか分からない。でもそれを恐れていたらどないにもできない」。

「今はボランティアもやっているんですよ … (廃業した) 店で売れ残った新品の洋服を海外に送ってあげるんです。荷物を作るのが大変 … ワープロで年賀状も出しています」。

4. Dさんの場合 (80代前半、男性、脳血管障害による右片麻痺)

Dさんにとって放送大学は、退職後の生活への移行という意味があり、それは、以下の体験から形成されていた。

大学を卒業し、長年支社長として管理的な仕事を行ってきたDさんは、定年退職の翌月に放送大学の受講をはじめ。まもなくして友の会の設立と運営を任されることになる。組織の運営はなじみのある作業であり、スムーズに退職後の生活に移行するきっかけとなっていた。

5年前に脳血管障害による右片麻痺を発症した後は歩行や書字が困難となるが、月一度届くテキストを楽しみに放送大学での学習を続けている。大学に所属し学習を続けていることに誇りを感じ、近く25年の永年表彰されることを楽しみにしている。Dさんは週に一度デイケアに通っているが、そこのプログラムは「学習」とは位置づけて

いない。

a. 自らの意志で将来を選択する

「59歳の定年の1年前にカーラジオから放送大学が流れてきて … それをきっかけに入ったんです。何かやらなければと思っていたところで。それまでは放送大学なんて全く知らなかったんですよ。タイミングが良かったんです。誰かに勧められて入った人が多いけど、私は自分から入ったんです。これは自慢できます」。

b. 退職前の仕事が生かせる作業に出会う

「スクーリングの会場準備をするんです。『Dさんは本当にきっちりとやってくれる』と言ってもらうと嬉しくて。どのように人や時間を仕切っていくかということは、これまでやってきた仕事に通じるところがあるんです。… 頼まれて長いことやりました」。

c. デイケアとは異なる放送大学

Dさんは、脳血管障害発症後は友の会の役員を退いたが、「相談役」として関わりを続けている。右手で字を書くことが難しくなったが、「… 送られてきたテキストを読んでポイントをまとめて書き留めておいてから聞く」ことを続けているうちに、「最近ようやく左手で字を書けるようになりました」と語っている。「週に1度デイケアに通っていますが、そこはリハビリというか … 将棋をやったりしているけどね。放送大学とは全く違うね」。

IV 考察

本研究の目的は、高齢者放送大学とそこで学ぶ障害をもつ高齢者を事例として、学習支援体制と障害をもつ高齢者の学習の意義を描写し、そこで

を理解することであった。

A. 高齢者放送大学の学習支援

いなみ野学園は日本最大規模の高齢者大学である。日本海から淡路島までの範囲をかかえる兵庫県では、ひとつの高齢者大学が県下の高齢者全体への学習機会を提供することには限界がある。高齢者放送大学はこうした地理的問題を克服するひとつの方策であり、実際、山間部などでの利用者への貴重な学習機会になっていた。この点は同時に、移動が難しい障害をもつ高齢者への学習機会の提供になっていると考えられる。

ラジオというメディアによって繰り広げられる放送大学での学習に、いくつかの特徴を見いだすことができた。第一は時間帯である。講座は朝6時30分から放送される。日中何かをしながら聴くのではなく、朝の早い時間帯は静かで、集中することができる。第二に、ラジオは音でしか表現されない分想像力をかきたてられ、さらに、直接「私」に語りかけてくれるように感じられるパーソナルなメディアであるといえる [11]。真鍋昌賢も、ラジオ深夜便の利用者分析から、ラジオ番組が高齢者の生活にうまく溶け込んでいるという結果を報告している [12]。本のような視覚に訴えるメディアやテレビのような視覚・聴覚双方に訴えるメディアよりも、ラジオのように聴覚のみに訴える情報のほうが、記憶の定着が大きいという指摘もある [13]。Bさんは、「お話の音の響きが人間の体に素直に届く」と語り、心に響く語りを自分の経験に引き寄せて、過去を思い出していくことができる」と指摘していた。高齢者放送大学の講師のなかには、同世代で社会的に活躍された方が多い。たとえばこうした講師の方々の懐古談を聴くことは、障害をもつ高齢者にとっても、活動的だった年代を想起させることにつながるのかもしれない。高齢期の進行にともない過去への回顧のニーズが高まるという調査結果 [14] から、平

均年齢76歳の高齢者放送大学の受講者にとっては、過去の回顧とつながる学習機会となっていると考えられる。さらに放送大学は、聴きっぱなしで終わらないところに第三の特徴がある。本科生は、課題番組を聴講してはがき1枚のレポートを提出する。Cさんが指摘していたように、自分の思いを小さなはがき1枚におさめることは難しい。片麻痺によって利き手が不自由になったDさんは、左手でようやく書くことができるようになったと述べていた。自宅にしながらできる学習と適度な挑戦感をあわせもつ課題。そして課題をやり遂げたあとには、担当の先生から返信用はがきで個々に助言が返ってくる。こうしたやりとりのなかにも、高齢者放送大学にパーソナルな側面をもつ学習の要素がうかがえる。

B. 障害をもつ高齢者の放送大学を受講することの意味

高齢者放送大学を受講する4名に通底する意義として、「人や社会とのつながり」がある。これには、放送大学の大きな特徴としての対話性や反響性が指摘できる。とくにはがきによる感想文の提出が鍵となっていた。感想文は毎月のテキストの「心のこだま」の欄に掲載されるが、この反響については、Cさんの語りからうかがえる。脳卒中になって一人暮らしの心細さを綴ったところ、すぐに（見ず知らずの人から）手紙が届き、「はじめてなので病気の心得を知らないでしょう。そういう人に教えてもらおうのです」と語っていたように、だれかが応援してくれているうれしさや、「(自分よりも高齢の方から)『休んでいるのではないか?』と案じる手紙も来るので一生懸命にやる。ふるいもってね」「こういう人は実行が早い。すぐに手紙がくる」といったように、小さな交流がしだいに深化していることがわかる。そしてそれは「スクーリングで会いたい」という願望に発展し、スクーリングに参加するという行動を引き

起こす。「出会って話していると誰でも何らかの傷を負っていることがわかる。それを慰め合ってね … 誰とでも友達になれるのは幸せ。出会ってよかったな〜とスクーリングに行っている」。こういう背景には、高齢者放送大学がパーソナルな側面をもつ一方で、配布された受講者名簿で交流を促すしくみをつくり、スクーリングや自主活動による交流的な側面を提供していることが鍵となっていよう。社会的世界との直接的な交流の機会が減少する障害をもつ高齢者にとって、家族や医療関係者以外の者と、反響性のある交流の場が築けることは大きな意義があるといえる。そこにおいては、主に精神世界の充実化や知識獲得を軸とする交流という点で、医療、保健、福祉の場における交流とはやや異なる「学習」を介した交流があるといえよう。

また、生涯学習は、先生と生徒という関係をこえて、同じ立場で学びあう集団であることが、いわゆる学校教育とは異なる点である。この点でAさんは、「教授陣」とは気軽に電話して相談をする一方で、相互に支え合い、学びあう関係を築いていたといえる。またCさんも、スクーリングで一緒に食事をする場面で、難しい話をする先生の「普通のよいお父さん」としての人間性にふれ、自分と同じ視点をもつ仲間として受け入れている。

次に、Dさんのように退職によって生じた職業生活に代わる新たな社会的つながりの確保という意義も、高齢者放送大学は担っていると考えられる。友の会の運営やスクーリングの準備のために各地方に組織をつくり、その運営を自主的に行なう人材が必要となってくる。Dさんにとって高齢者放送大学は、過去の経験を活かし、適度な挑戦感のある作業となっていた。退職により、それまで生活の中心だった（職業的）組織から離脱するという喪失感は、あらたな組織に所属し、活動しているという実感を得ることで和らぎ、スムーズ

な退職後の移行がなされていたといえる。ただしこの移行は、Dさんが脳血管障害を発症する前の時期のことであり、発症後に新たな社会に入ることとは、たとえばAさんが車いすで迷惑をかけるかもしれないと受講を躊躇していたように、また異なった課題が生じる。こういう状況においては、信頼のおける人からの積極的で温かな支えが不可欠であることがAさんの事例からもうかがえる。

適度な挑戦感という意味で、Bさんが語った自然のなかで身体の奥深くにしみこんでいる動きのパターンが蘇る体験は興味深い。一般的に高齢者は、身体的な障害により、安全のために自らの行動や生活範囲を制限していくことがある。自然のなかで解放される感覚や、昔の楽しかった身体感覚が蘇るような作業は、挑戦とリスク管理のバランスをとりながらも、障害をもつ高齢者にとって重要な課題であると考ええる。

ハワード・マクラスキーは、高齢者教育の軸を「ポジティブな結果を生み出す前進的な活動 (affirmative enterprise resulting in positive outcomes)」[15] ととらえたが、障害をもつ高齢者においてもこの姿勢は涵養できるといえよう。今回、調査した高齢者は、老いと死を身近に感じながら、人生に対する前向きの姿勢を創出していた。Aさんは、自宅で人生相談や、語り部を行っていた。Bさんは、市民参加型の情報誌の編集委員としてまちづくりの情報発信に関わり、子どもたちへの読み聞かせによって次の世代への伝承に深い関心を寄せていた。また、そうした作業で日々の生活を満たすことによって、持続的な痛みをようやく手放していた。Cさんは、多くの友だちとの交流とそこで生まれた作業に支えられながら、そしてボランティア活動を通じて貢献的ニーズを充足させて一人暮らしを営んでいた。

高齢期にある人びとの障害や老いに対する不安を学習による精神的な充実感によっていかに超越できるか、ここにも障害をもつ高齢者の学習の意

義があるといえよう。

謝辞

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究C、研究代表者：藤原瑞穂、研究課題番号23531093)の助成を受け実施した。本研究に協力いただいた4名の皆様ならびに高齢者放送大学元学長竹田憲司氏に、心から感謝申し上げます。

【文献】

- [1] 堀薫夫. はじめに：教育老年学と高齢者学習, 学文社, 2012, i - v.
- [2] 堀薫夫. ポジティブ・エイジング：教育老年学の展開 (堀薫夫), 学文社, 2006, 80-90.
- [3] シャロン・カウフマン. エイジレス・セルフ：老いの自己発見(幾島幸子訳), 筑摩書房, 1988.
- [4] ベティ・フリーダン. 老いの泉 (上) (下) (山本博子・寺澤恵美子訳), 西村書店, 1995.
- [5] ケン・ディヒトバルト. エイジ・ウェーブ：21世紀の高齢社会 (田名部昭・田辺ナナ子訳), 創知社, 1992.
- [6] Tornstam, L. *Gerotranscendence*. Springer, 2005, 31-47.
- [7] 権藤恭之. 百寿者研究の現状と展望. 老年社会科学 2007; 28 (4) : 504-512.
- [8] 藤原瑞穂・堀薫夫. 障害をもつ高齢者の学習ニーズと活動制限の関連. 老年社会科学 2002; 24 (1) : 51-60.
- [9] アメデオ・ジオルジ. 経験. 記述資料分析の実際：現象学的心理学の『理論と実践』(吉田章宏訳). 看護研究2004; 37 (7) : 607-619.
- [10] 兵庫県生きがい創造協会編. 平成24年度事業概要. 私家版, 2012.
- [11] 伊勢知成好. 高齢者にやさしいラジオ深夜便. 1999年映像情報メディア学会年次大会要旨集 1999 : 415.
- [12] 真鍋昌賢. ラジオと高齢者：現代文化の社会学入門 (小川伸彦・山泰幸編), ミネルヴァ書房, 2007, 233-249.
- [13] 堀薫夫. 耳をすませば：発達心理学 (現代心理学シリーズ7 山本利和編), 培風館, 1999, 167.

- [14] 堀薫夫. 高齢者の学習ニーズに関する調査研究：60代と70代以上の比較を中心に：教育老年学の展開(堀薫夫編), 学文社, 2006, 122-143.
- [15] McClusky, H. Y. Co-Chairman's Statement, in White House Conference on Aging(ed.) *Toward a National Policy on Aging* (Final Report, Vol. II, 1971 White House Conference on Aging). U. S. Government Printing Office, 1973, 2.

The Meaning of Learning via Senior's Radio Programs for the Elderly with Physical Disabilities

Mizuho Fujiwara¹ Shigeo Hori²

¹ Kobe Gakuin University

² Osaka Kyoiku University

Radio programs for seniors have been provided in Inamino Gakuen Senior College. This study was conducted to understand the system and the significance of learning via Radio Programs for the elderly with physical disabilities.

By an interview survey to the coordinator of this program, we understood the “outreach” aspect of this radio learning system. From surveys to 4 learners with physical handicaps, we found out that this learning system has provided the inner and outer aspects of the significance of this type of learning. Affirmative and positive aspects of life, an adequate level of a sense of challenge were cultivated by Radio learning, and also equal and responsive communication networks via learning were emerged. Elders in their oldest-old days, facing with the realities of death and physical disability, were supposed to be struggling to create a positive sense of their life by participating in this Radio Programs.

Key Words : elderly, disabilities, learning, radio programs for seniors